2018 年 10 月

# 日本フィル「被災地に音楽を」

# 訪問コンサート レポート 第 41 号

被災地支援の訪問演奏は、2011 年 4 月からはじまり、2018 年 10 月 9 日現在、通算 258 回となりました。

2018 年 8 月 9 日　　ワークショップ／クリニック

8 月 10 日　　コンサート

会場:岩手県大船渡市　大船渡市民文化会館　リアスホール

出演者

司会・歌　中村萌子　　ピアノ・デュオ　伊藤慧＆漆間有紀

日本フィルハーモニー交響楽団

ヴァイオリン　齋藤政和／佐藤駿一郎　　ヴィオラ　　中川裕美子

チェロ　　大澤哲弥　　コントラバス　宮坂典幸

フルート　　泉　真由　　クラリネット　　前田優紀

打楽器　　福島喜裕／濱仲陽香

# ばばば！オーケストラ

## 赤澤鎧剣舞に出会う～

三陸沿岸は、世界的にも類まれな伝統芸能の宝庫です。2011 年以降大船渡を訪れて 5 回目となる今回は、大船渡リアスホールを舞台とし、内容を一層充実させての開催となりました。江戸時代から伝わる伝統芸能「赤澤鎧剣舞」を受け継ぐ大船渡市立大船渡北小学校の児童とのワークショップや、地元の高校生を中心とした楽器指導のクリニック、そして大船渡北小の子どもたちとの共演を盛り込んだサン＝サーンスの《動物の謝肉祭》参加型コンサートを行いました。

また、初めて三陸を中心に展開している舞踊の国際フェスティバル「三陸国際芸術祭」の連携事業として実施。コンサートの開演前のホワイエにてアジアン・パフォーマンスが始まると、周囲にみるみる人が集まり、異国漂う踊りに惹きつけられました。

日本フィル　動物の謝肉祭

アジアン・パフォーマンス

ミロトダンス（インドネシア）

## クリニック（8 月 9 日）

大船渡市内の高校の吹奏楽生徒を中心に、フルート、クラリネット、打楽器パートのクリニックを行いました。台風接近につき、夕方からの開催が危ぶまれましたが、当日は少し雨が強い時間帯があったものの無事に実施できました。高校の吹奏楽コンクールを数日前に終え、講師が基礎練習の必要性などを話しながら一人一人の音を確認しながら丁寧に進めるなどし、生徒も真剣そのもの。有意義な時間となりました。

日本フィル「被災地に音楽を」は、三菱 UFJ ニコス株式会社の支援を得て行っています。

特別寄稿　　2018.10.18

# 伝統文化は心の背骨

## ― 赤澤鎧剣舞とサン＝サーンス『死の舞踏』 ワークショップ

鉢村　優（音楽評論）

2018 年 8 月 9～10 日に、日本フィルは「赤澤鎧剣舞」を受け継ぐ子どもたちとワークショップを行い、翌日のコンサートで共演しました。地元の民俗芸能と共演することは日本フィルにとっても初めての試みです。三陸沿岸は世界的にも類いまれな伝統芸能の宝庫。「赤澤鎧剣舞」は江戸時代から伝わる民俗芸能で、平家の亡霊を、高僧が念仏を唱えて鎮めた様子を舞踊化したことに由来します。

ワークショップのメイン・ファシリテーターであるマイケル・スペンサー（以下マイクさん）はジェスチャーで子どもたちを舞台へ招きます。子どもたちはおっかなびっくり、興味津々。続いて子どもたちを 3 つのグループに分け、グループごとに「誰もが知っているリズム」を挙げて一緒に叩いてみます。するとマイクさんが足踏みをし、胸を叩く「タン・タカタカ」というリズムをたたき始めます。やがて子どもたちも合流し、みんなで輪になってしばらく同じリズムを刻みます。

各グループのために用意された木琴には、ところどころ赤と青の付箋がつけられています。まず赤の付箋の音を自由に使って「タン・タカタカ」を演奏します。続いて青の付箋の音も。その後全体で赤と青の「タン・タカタカ」を演奏していると、最初は混沌としていた音響が澄んでいくのが分かります。合奏を続けるうち、子どもたちの耳が互いに向かって開いていったのです。

その後、グループワークを重ねて作った音楽を全員で合奏し、締めくくりに日本フィルがサン＝サーンスの『死の舞踏』の全曲を演奏しました。

**コンサートでの演舞**

　翌日のコンサート「ばばば！オーケストラ」の冒頭にマイクさんが登場し、ワークショップについて紹介しました。赤澤鎧剣舞と『死の舞踏』には「死せる魂を呼び集める」という共通点があることに触れながら、スライドを使って音の具体的な場面をレクチャーしながら演奏していきます。

　続いて間を開けずに子どもたちによる剣舞です。腰を低く落とし、両手を振り上げた姿は荒ぶる「平家の亡霊」、そして念仏で彼らを鎮めるのが「僧」です。引き締まってダイナミックな演舞に、客席の大歓声が送られました。

　ある保護者の方は「剣舞を通じて心のバランスを取っている。一人一人に大好きなものが見つかるといい」と子どもたちと芸能の関わりについて聞かせてくれました。大好きなものが心を支える—伝統芸能とクラシック音楽をテーマに、互いに学び合うことを目指した二日間で最も象徴的だったのはこの言葉かもしれません。「大好きなもの」という共通項を軸に様々な背景を持つ人や作品と関わり、心のネットワークを編む。ともに試行錯誤する瞬間から、わたしたちは何ものかを共有する仲間なのです。それは子どもたちに限ったことではありません。好きなものに打ち込む子どもたちを応援することを通じて、ご家庭の中にも複数のよりどころが生まれているようでした。こうした共体験は未知の出会いを通じてより広く深くなり、心のセーフティネットとなって日々を支えていくのではないでしょうか。

写真：平舘 平